

大浮世絵展 歌麿、写楽、北斎、広重、国芳 夢の競演

東京都江戸東京博物館 2019. 11. 19～20. 01. 15

福岡市美術館 20. 01. 28～03. 22 愛知県美術館 20. 04. 03～05. 31

本展は、2014年に全国3会場で開催され、約38万人を集めて浮世絵ブームを作り出した「大浮世絵展」に続く展覧会で、今回は、5名の人気絵師に焦点を当てて、誰もが一度は目にしたことのあるとされる作品が展示されている。

展覧会の構成は、5章からなり「喜多川歌麿」は美人画、「東洲斎写楽」は役者絵、「葛飾北斎」と「歌川広重」は風景画・花鳥画、「歌川国芳」は勇壮な武者絵と機知に富んだ戯画と真髓が凝縮された作品「約260点」からなる。

東洲斎写楽《四代目岩井半四郎の重の井》1794年(江戸時代) 大判錦絵



河原崎座上演の「恋女房染分手稿」に取材した作品で、由留木家のお家騒動を背景として、伊達の与作と重の井の恋、それにまつわる悲劇を描いたものである。由留木家の家臣伊達の与作が若殿の恋人芸子「いろは」の身請け金を「鷲塚八平次」らに盗まれ、更に瞳元「重の井」との不義により生家から勘当される。「重の井子別れ」の道中双六の段で、わが子である馬子三吉の守り袋を手にして三吉を見つめる重の井が描かれている。

葛飾北斎《諸国瀧廻り ^{しもつけ}下野黒髪山きりふりの滝》1833年頃 大判錦絵



錦絵「諸国瀧廻り」シリーズの作品の一つで、黒髪山(男体山)東の「霧振の滝」は、日光三名瀑の一つの景勝地で、幾筋にも分かれて落下する滝水が実に動感豊かに表現されている。画伯が傾注したのは、水という捕らえがたい対象物が、“落下する水の表現がこれほど多彩にあらうとは”と、水が落下する違いによって如何に変化を見せるかという点にあったとされている。

歌川国芳《其まゝ地口猫飼好五十三疋》1848年頃 大判錦絵 3枚続の部分



大好きな猫53匹でつないだ東海道五十三次に登場する宿場を、猫に関するダジャレに置き換えた戯画である。

「地口」とは「語呂合わせ」のことで、猫が駅名との語呂合わせとなり、それに似合う動作を猫にさせていて、五十三次の最後の駅「京」(左下)は、虎猫に捕らわれた鼠に「ぎゃう！」と言わせて終わっている。